

「立派な部屋ですね」

「そうか？」

一人暮らしなので特別広くもない。部屋は八畳あるが、一部屋だけだ。

「お前の部屋ってどんなんだ？」

「僕の部屋はすごく狭くて古いです」

だろうな、と思う。激安モヤシが糧となる生活をする少年が、立派な部屋にすんではと確かに思えない。

「あんまり良いモン作れねえが文句言うなよ」

「文句なんてとんでもないです、っていうか、本当にあの、すみませんありがとうございます」

ぶんぶんと首を横に振り、手をわたわたさせる。そうかと思うと、恐縮した様子で深々と頭を下げる。

（なんか、こいつやっぱり可愛いな）

もはやそれは確信に近い。

適当に座るように言い、予定通り焼きそばを作る。麺は三袋入りだったものを全部使ったので、野菜がやや少ないが、この際に良いか、と思う。

どうせそのうち今日買ったモヤシを食すのだから、今日くらいは炭水化物多めでも構わないはずだ。男二人だし、帝人は高校生なのだから三人前くらいは簡単に食せるだろう。

「ほら」

ごとな、と適当に盛りつけた焼きそばをテーブルに置く、ぺこり、と頭をまた深々と下げる。

「ありがとうございます」

そうして焼きそばに向ける目はもはや陶酔に近い。見るからに『まともなご飯は久しぶりだ』と思っているのは明らかだった。

「いただきます」

いちいち礼儀正しい態度で、きつとこいつまじめなんだろうな、と思う。静雄の周囲にはいなかった人種だ。そもそも、あまり静雄の周囲に人間はいないのだから。

「！　おいしいです！」

ぱつと輝く目、紅潮した頬。

「そうか」

浅く頷きながら、こいつすげえ可愛いな、とまた静雄は思う。目の前の少年は、とんでもなく、可愛い。

食べてみれば、確かに悪くない。けれどそれは静雄の料理の腕云々ではないことはわかっていた。外食ならばトムやヴァローナと共に食すことも珍しくないが、こうして自宅で誰かと食することなど滅多にない。たまにトムと酒盛りをすることはあるが、それはあくまでも酒がメインで、つまみがせいぜいだった。こうして誰かと『食事』を共にするのは、また違う。

「ごちそうさまでした」

手を合わせ、また頭を下げる。

「こんなにちゃんとしたご飯を食べたの久しぶりです」